

手遊繪と芳藤

松村翠山

私は軍に手遊繪計りでなく版畫の道に就いて、何等の智識も讀書もありません、下世話に言ふ、下手の横好きと同様な氣分に弄られて、眞實して居る迄でありましたから、目下の所では的確な考證の下に、起原や沿革は述べられません。折々手遊繪の凡ての方面を調べたり、頗る興味ある事と思ひますが、未だ研究の機會を得ません、夫が爲め茲には極めて漠然とした繪原を記すに過ぎません。

手遊繪は古い時代から板行されて有名の浮世繪師の描いた繪も少くない様であるが、特に安政の初頃から隆盛の機運に向つて、明治十五年頃が頂上であつた、其後印刷術が進んで、石版や寫眞版の爲めに壓倒されて、遂々衰微して仕舞つたのは、時代の推移とは言へ、誠に惜しい事である、隆盛であつた三十餘年間は、日本橋馬喰町の西興、江辰(江崎屋辰二郎)樋口、横山町の岩喜、辻文、通油町の藤慶、兩國廣小路の大平、加賀吉、芝神明前の泉市、佐野屋、若狭屋、市ヶ谷八幡前の佐野市、下谷荷荷町の文正堂、堀江町の海老林、人形町の具足屋、土橋の政田屋其他の版元が、各々意匠を争つて毎年夥しい枚数を發行した、版

元の内では芳藤の繪を主に扱つたのは、荷荷町の文正堂と横山町の辻岡屋の二軒であつた、前者は殆んど手遊繪専門で市内に顧客が多く、後者は手遊繪もあるが、概して婦人繪、芝居繪、双六、有封繪の類で、文正堂の繪に比較すると彫刻も措方も餘程劣つて居る、而して大部分は仕入物と言ふ格で地方に賣捌れて居た。明治十五年以後今日でも手遊繪を販賣しては居るが、繪具と紙質が極めて劣悪になつた爲め、鑑賞の價値あるものは此しもない。

手遊繪の隆盛になつたのは天保六年の夏、黒船の渡來が動機となつて、世の中が騒がしくなり、政治上は勿論一般の經濟状態にも著しい變動があつて非常の不景氣になつた、其上等層は人心の動搖を恐る政策として諸種の御用を出した其影響を蒙つて普通の繪師も賣行が甚しく減した、夫が爲め諸方の版元が出版を手控へる様になつた、斯なるは從來未曾の事は使はぬと言つた風の、江戸つて兒肌で生活して居た浮世繪師の連中は大恐慌で、彼等社會の貧困が非常に悪くなつた、そこで普通の繪師と形式の異つた版元の、兒童を顧客の中心とした、主に一枚もの手遊繪を描き出したのが、芳藤、芳春、芳虎、芳綱、芳成、芳興、芳隆、芳宗、芳良、芳正、重宣、國綱、國綱、國政、國隆、國丸、周重、國利、隆興等で嗜好に違つた爲め賣行が盛になつたのである、彼中芳藤の如き名手が、當時の年中行事、時世雜、流行童話、動物、器物等の状態を、實際的、假想的、教訓的、諷刺的、滑稽的、兒童に同化する氣分で描いた爲め最も兒童に歡迎される様になつた。

芳藤は國芳門下の錚々たるもので、初めは武者繪、風俗繪、芝居繪、婦人繪等を描いたが、努力した割合に歡迎されなかつた、其内に錦繪の賣行が詰つて來たので、從來の方針を變へて組上燈籠や手遊繪を専門に描く様になつた、元來手腕の優れて居た彼が取材や描寫に非常なる苦心をして、凡ての眞髓を捉へ巧に手遊繪化したので、同種類の物の内で異彩を放つ様になつた、夫が爲め彼の版下は諸所の版元で引取風になつたらしい、芳藤の描いた手遊繪で現存して居るものの版元が多數なるに就いても推定が出来る。而して芳藤が作畫に忠實であつた實例は、私の所蔵して居る手遊繪の版下を見ても、區劃の極めて細い繪であるに拘はらず、少くも一二回多くは四五回の訂正を施さぬものはない、斯様工合で彼れは一線半點の微も忽がせにしなかつた事が能く判る、本文に挿んだ手遊繪の如き其一部を語るものである、夫で



あるから彼の歿後廿餘年を経た今日、手遊繪と言へば直ちに芳藤の名が聯想される様になつたのである。嘗て芳藤の繪を出版して居た馬喰町三丁目樋口繪草紙店主の談に依ると、或年同店で三枚續きの組上燈籠の下繪を依頼したが、數日を経るも下繪を届けて來ない、同人の氣質を知つて居る主人は其儘にして待て居たが、餘り長くなるので催促をした、すると二三日経て芳藤が自身で下繪を持って來た、主人は數日費して描き上げたのであるから、直に彫刻師へ廻せると思つて居ると、芳藤は一旦渡した繪を披いて居たが、未だ氣に入らぬ箇所があるから訂正して二三日の内に届けると言つた、其折主人が「先生斯様繪は左様丁寧の事は要すまい」と言ふと芳藤は頭を振つて「左様でありませぬ私は死んでも、繪は後に造るもので

すから、自分の氣に入つたものでなければ、板にはかけられせん」

と、語られたと樋口氏より聞いた事があつた、此言葉に依るも芳藤の抱負を知る事が出来よう。

芳藤は手遊繪の顧客が兒童を中心として居る事に留意して、取材に苦心した事は勿論であるが、生來天性の彼は微細な事でも（兒童と同様の氣分に）徹底するまで研究をせねば止まなかつた、夫故随分奇行もあつた様である。

或年の冬朝起ると直に寝衣の儘房楊子を叩へて、洗湯に出懸たが正午近くになつても戻らぬので、家人は心配して居ると空腹になつたと言つて歸つて来た、家人が何方へ行れたと尋ねると、近所の知人に急用を憶ひ出したので立寄つて来たと言ふたが、其實彼は湯屋の近所まで行くと獅子舞が賑かに囃子たて、居たので兒童と伴に其後に跟いて拍子を取りながら歩いて居たが、朝湯に出たのに氣がついた彼は慌て、入浴を済ませて歸つたのである事が後に判つた、此外物賣の後を跟いて歩いて呼聲の研究をする爲に肝心の用事を忘れたり、祭禮に神樂屋臺の前へ立て身振手振をして傍の人に笑はれた事などは數回あつた相だ。

芳藤が手遊繪を描き初めた當時の署名は「藤よし」と記した繪が多い様である。是は因襲的の習慣に捉へられた結果であらうと思ふ、現今の如く藝術家が一般社會より、重視せられなかつた時代に於ては、彼等の品位も低く自ら「繪描き」なる職人氣質に甘じて居た、随つて師弟關係の如きもなか／＼嚴格のもので、些し異つた試みを爲すには師匠の許諾を要したものである、師匠の不承知である事を敢てすれば直ちに破門の憂目に會ふたものである、其様窮屈の時代であつた爲め芳藤も師の國芳や同門の人達に倅つて最初から「よし藤」と署名をしなかつたものと考へられる。

(終)

● 書畫骨董雜誌社の書幅展覽會

同社主催にて十月廿三、四兩日午前九時より午後四時迄芝公園第十八號の二寶珠院に於て(電車赤羽開催の由、因に展覽品は希望に任せ即賣す)

浮世繪師掃墓録 (五)

莊逸樓主人

勝川春章

春章画



役者繪は鳥居派から出たが、單に紋どころで其人を利せかた甘仕打は明和頃の人にはおも見てとつて、あの太い描線を避けて其人の特長を巧みにとつた、眞の似顔繪と云ふものを創作したのは此春章である。

ト云つて後の寫樂のような極端な寫實でもない、例はこの書を芝居から見たものとする。

春章は土間の七三、寫樂は小一から云ふ行方であつた。

春章は勝宮川春水の門で俗稱祐助、旭明井、西爾、從書生、六々庵、李林等の別號がある、嵩谷翁について一蝶風の草書を學び、美人繪、武者繪

勝川春章筆 似顔繪 落款



等肉筆に版畫にその卓越せる技倆を示めして居る。

明和五年の夏中村座で「操歌舞伎扇」と大名題を据えて、雁金五人男、車引、忠臣蔵、青柳觀、十帖源氏の寄集めで役者は幸四郎(五世團十郎)二世八百歳、初代秀鶴、天幸、傳九郎、四世團十郎と云ふ顔揃ひ各々得意の出しものに隅から開迄ズーイと響き渡つた大評判をとつた。これを當時人形町繪紙問屋林屋に寄箱して居た春章に描かしたのがこの狂言の内雁金五人男の一組、落款の所へ店の判箱から壺形に林と彫つた仕切判を間に合せの印章がはりにボンと押し賣出した。

物珍らしいは江戸の常、鳥居風の大まかに描きた眼には又一倍、滿都の人氣を錦繪屋の店先へ集めて、利いた風な大本田が村田張をしやくつてドクモ似顔は壺屋に限りやすと、頼まれせぬ吹聴を頼まれたように云觸す、これらの手合から奉つた壺屋の表徳が大想な廣告となつて版毎に賣行、夥しく、名聲頓に昂ると

「世絵」
「浮世」
芳藤の手遊繪と
異り繪の價値

松村翠山

芳藤の描いた繪を見る度に、彼の眞價が認められて蒐集家の間に、渴望される機運に到達するものも、近き將來であらうとは、私が絶えず懐いて居る感想である、彼が浮世繪師として充實した技能を有つて居た割合に、世人の注意を惹ぬのは、作物の大部分が、兒童を本位とした手遊繪の如きもので、比較的印象に残り難い纏まらぬ繪の多いのが影響した爲かとも思はれる、然し近頃浮世繪を扱ふ店より彼の繪を尋ねる人が増加したと屢々耳にするが、夫れは當然の事であらざるに、彼の研究的努力を持つて、寧ろ不思議に感ずる位である、彼の研究的努力を持つて、浮世繪に筆を執つた當初より手遊繪以外の繪に、全力を傾注させたならば、或は英泉、國芳、廣重以上の繪を残したかも知れぬ、手遊繪師の權威者として残した、優秀なる種々の繪から想像しても、強ち不當の言辭ではあるまい。

異り繪の内、考案の優れたものに就て聊か愚見を述べよう、彼の手遊繪は識者の間に定評があつて、實物を得らるれば直に判る事柄であるから、殆んど代表的作物と見做されるもの許り記す事とする。

「人物士農工商」「湯屋のかざり立」等は孰れも北齋風に描いたもので、江戸時代の風俗が眼前に躍如として、江戸趣味者の垂涎措ざる逸品である「百面相眼かつら」の如き十二種の眉目を描いたものであるが、喜怒哀樂愛憎其他の表情が巧みに現はれて居る、此外「住吉踊かくべ盡」はうづさあそび「あね様にはうや盡」「武者両面合」おひな様兩面合「猫の戯書」地獄の有様を描きたるもの「猫のあそび」あめ屋しん粉屋おこし賣等の物賣を描きたるもの「猫の嫁入り」大長家猫のぬけうら「裏長家の生活」状態を描きたるもの「鳥づくし」「鳥の商人盡」「毛だもの商人盡」「蟲づくし」「祇園會家座付」「龍宮飾立燈籠」等であるが、圖案や色彩は勿論描寫の巧妙なる點は他の手遊繪に見る事を得ない、就中「龍宮飾立燈籠」は藍を巧に使用したもので、龍宮城頭を徂徠する雲の如きは、北齋の手法に酷似した所が

一段加古川本藏の御姿「横濱譽の勝負附」「寶船」右封繪の藤娘「同ふの字盡」寶の持込「麻疹送出し」「麻疹禁忌」等は最も珍なるもので、「五十三次猫の怪」「唐の兒が寄り固まつて人となる」の二種は色彩の工合圖柄等師匠國芳が描いた同種の繪より優れたものである、女繪の「武遊なそらへ模様」「東都名所くらべ」「淨瑠璃道行盡」は國芳酷似の繪で人物の姿態や衣服の模様柄に細心の注意が拂はれて居る、三枚續の「本朝舶來戲道具くらべ」「縁の網成人鏡」「心夢吉凶鏡」「見まへ



「一眺とめ勢と標色」

のかごとといふてばんじつしむべきなりぬすびどの

「夫人げんは口が第一なり口はわざわい」

まへきくまへはなすまへ」の前者は影繪の内へ眼、耳、口の欲望を色摺にしたもので、後者は白地右方の上半部へ眼、耳、口を現はし同音相通する人物器具動物を按排した極めて美しい繪で一枚毎に次の様な繪解が記されて居る。

二世北齋幼時の逸話

山笑

生

予此頃青窓堂冬圃の隨筆まさきのかつらを讀しに左の逸話をのす

前北齋爲一老人は其名四方に高幼童といへど知る程なり師の弟子に深川高橋に住せる橋本某が伴喜三郎と云者あり幼年の頃堀江六間町なる砂糖店へ丁稚奉公につかはしけるが客のいとまある時は筆をとりてるがくれば自然主人の心に不叶終に家へ戻る父も心にまかせ北齋門人とす或日淺草觀音へ詣て堂内の掛額の中雪山等琳が筆をふるひし韓信市人の勝鬪圖をよく見て師の方へ行等琳が筆意眼を驚かすばかりなれど一の失有うしろの方に立居る市人の足小指のあるべき方に大ゆびありと語る師直さま喜三郎を同道して彼額を見るに喜三郎言にたがわす是迄數年多くの人こゝろつかずありしを若年の者見出し候は不思議なりと語られしが此喜三郎二代北齋と成りしが惜しいかな新吉原の遊女屋の養子となり終に畫名發せず未はいかやなりしや

とありこは萬飾戴斗の幼時の事ならんが本文記す如く二代北齋の稱を以て世人に知られし事か二代北齋は儀屋宗理な

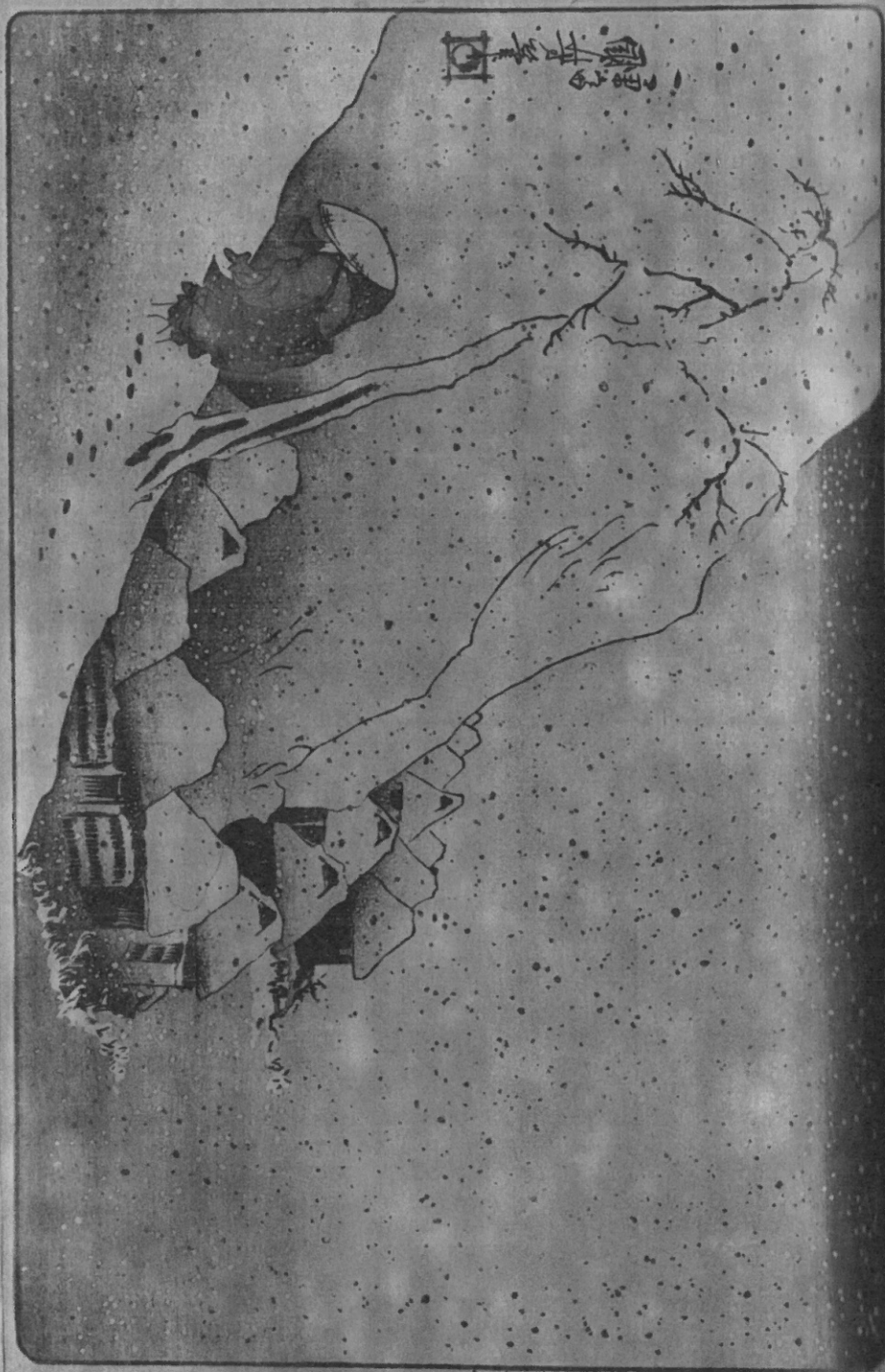
用心には入口をしめさかだるにはのみ口をさし紙入にはつばくろ口をしめやさしきをなごの口からもごのよふな事いゝ出すかもしれすよつてばんじ此ゑのごとくつゝしむべきなり(原文の儘)

要するに芳藤の手遊繪と異り繪の總ては、彼獨特の奇拔なる意匠と緻密なる描法に依りて、孰れも活躍して居る、而して各の繪に附加へてある、繪解の言葉も簡にして味ふべきものが尠くない、元來縮寫をしてなり原形のものゝ掲載すれば、斯様な不徹底の説明も要せず直ちに彼の眞價を認められるであろうが、夫の出來ぬのは主張の半も達せられぬ様心持もする。(終)

國芳の天津繪に就て鳶魚氏に

K T 生

浮世繪第三號及び第十一號にて「浮世又平名畫奇特」面白く拜見仕候、十一號にて類畫三點の中、嘉永元年改の三枚續は「俄に考へ難じ」と御記し有之候處、右は「浮世又平名畫奇特」を殆んど同じやうなる圖柄にて「流行達都繪悉代稀物」と題されたる三枚續(並木、湊小版)たるこゝ疑ひあるべからずと存じ候。さし出がましくと存じ候へ共一寸思ひ付き候まゝ。失禮。



北齋二代の圖 佐州塚原史中

世に手遊繪に就て

若尾 悍馬

昨年十一月に、若尾氏が其の著「おもちゃ館」を自費出版で發表せられたが、非賣品である爲に多くの人達の眼には觸れなかつた。そして斯の書は、著者が幼時に使ひ古して置いた玩具の片影からヒントを得て、「新ウソフロクダカラタマ頭カラ出放題ニ書イタケテ秩序ハ更ニ立ツテ居ナイシソレニドガイ研究ナドト云フ面倒ナコトハ大嫌イダカラ淺薄ナルガ上ニ間違が多イカモ知レナイが此道ヲ學者チヤアナイカラ其邊ノ誹ハ別ニ氣ニモトメナイ」と喘し書の儘に、古い記憶を骨子として筆を執られたものである。全篇百七十頁程の中から、「手遊繪」に關する部分だけを左に紹介する。

手遊繪は各其時代を表現す、當時の風俗人情嗜好、有りて有らゆる社會萬般の事物を採り來りて、之を繪に表はし以て其餘すなきを期す、實物の眞想界の假奇抜なる思索と細心なる工案とを以て筆を振ふ事縦横自在、當時の状態を知る一見數千言の文章を讀むに勝れるものあり、嘗て小兒の玩弄びたるに止まらず、大人にして亦之を究むれば以て得る所鮮少なからざるを信す。

錦繪の餘暇歌川國貞・歌川國芳等之れを試み、茲に始めて手遊繪の存在を社會に認めらるゝに至る、漸次流行し來りて各弟子皆な之に筆を染め、國貞門下貞秀・貞繁、國芳門

【乙】 娛樂的

一 人類に關する繪 (ル) 芝居狂言 普通

二 動物に關する繪 (カ) 動物其儘 猫靈犬一馬一

(ヨ) 動物に衣類を着せたる繪 猫の湯屋
 猫の芝居狂言 犬の芝居 鳥の芝居
 鼠の嫁入 獸の狂言 魚の戯れ

三 植物に關する繪 (タ) 植物其儘 花木靈

(レ) 植物に衣類を着せたる繪 酸漿の姉さん(つ)、
 酸漿の湯屋

四 日用品家具小間物 (ソ) 家具道具

(ツ) 手拭反物 (ネ) 化粧品小間物

五 玩具 (ナ) 玩具

(ラ) 面 (ム) 纏 (ウ) 凧

【丙】 工藝品

一 變り繪 (キ) 折りて變る繪

二 組立繪 (オ) 散布的 (ク) 集中的

三 手工繪 (ヤ) 合せ繪 (マ) 簡單なる張付繪

下芳虎・芳盛・芳幾・芳艶等盛名あり、後歌川派にして之れを畫かざるなく、國久・國利等多數其製作を見るありと雖も、最も有名なりしは芳藤なりとす、芳藤は手遊繪に於ける一種の天才にして、錦繪は其技到底師の國芳に及ぶべくもあらずと雖も、斯畫に於ては一頭地を抜き、前人後人比肩す可くも非ず、其畫く所數十版の多きを重ね、數十年の長き盛に玩囉され、明治廿四五年頃迄最も小兒の喜ぶ所なりき、其後有名なる畫家の筆を採らざる石版畫の起れる繪具の高價にして木版畫の引き合はざる等原因となり、漸次衰退し來りて、現今小兒の間に玩弄ばるゝは繪拙にして洋紙刷なる粗惡なるもののみとなれり。

「手遊繪」【甲】 文字的

- 一 學術的 (イ) 單語 (ロ) 算術
- 二 社會的 (ハ) 辻占 (ニ) 地口 (ホ) 唄 子守唄
- (ヘ) 加留多 いろは加留多 武者加留多
- (ト) 尻取文句繪 化物加留多 歌訓加留多
- (チ) 列舉體にして唄の意を含む

四 影繪

(ケ) 寫し繪 寫し繪

(フ) 廻轉代り影繪

五 裝束繪 (コ) 鬘を着くる繪 (エ) 衣服を着くる繪

【丁】 假想的

【戊】 雜

- (ア) 將基盤 (サ) 寶盡札盡
- (キ) 福笑 (ユ) 十六むさし
- (メ) 双六 (ミ) 鬘斗盡
- (シ) 疱瘡繪 (エ) 千代紙
- (ヒ) 紋盡 (モ) 目鬘
- (セ) 鞘繪 (ス) 狂畫

▼ 辻占繪 極彩色の役者の似顔と字とを一劃おきになしたる精巧なるものより、繪と字と同一劃に入れたる上下雲形に赤青の二色刷のものに至る種々あり。

▼ 地口繪 同じ劃中に簡單なる繪と字とを書きたる戲言、又は諷刺を主としたるものにして「目出度候かしく」を繪が蕎麥と菓子を食べる圖を畫き「目出銷蕎麥菓子喰」となし、又は瓢箪が着物着たる圖に「ちようたんお言いでないよ」と

一 蕙齋芳幾畫

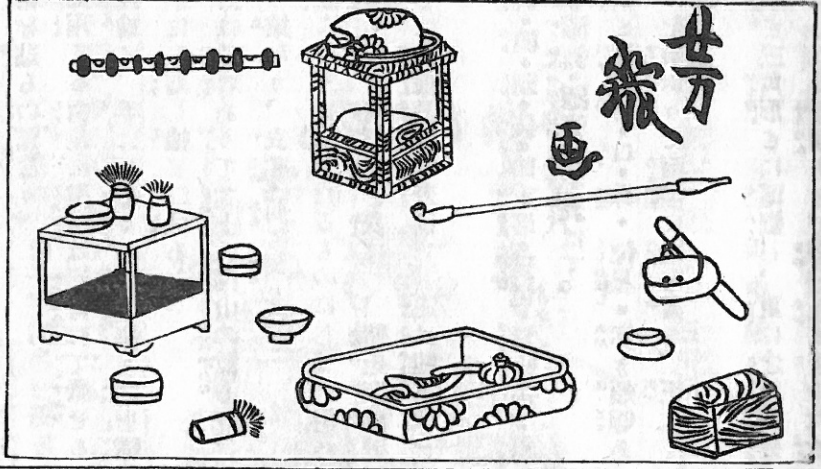


染め抜きたる所なり。
 ▼植物に衣類を着せたる繪 酸漿の湯屋にて、酸漿が剥きたる皮を身體となしたる點妙なり、此繪も有名なり。
 ▼玩具 殆ど凡ての玩具を書き或は大小混じて畫けるあり、或は區劃して中に藏めたるあり、而して黄地に綠色を以て畫きたる少しく大判にして替も宜し。
 ▼面 惠比須・大黒・大天狗・小天狗・ひよつとこ・おかめ・磐若・天狐・狐・金太郎・桃太郎・魔神・赤鬼・青鬼・鹽吹・馬鹿・角外道・外道・丹前・朝比奈・猿等を書けり、何れも升型に仕切りたる中に藏めたり。
 ▼風 繪風・字風を交々書けり大なるは全紙を二つに仕切りた

書きたる類は殊に面白し。
 ▼唄繪 簡單なる繪と字に赤青の霞を引ききたるが多く、毬唄子守唄多し。
 ▼加留多繪 全紙を數十劃に分ちたる中に、書と字とを交々組合せたる繪にして、彩色も比較的密なり。
 ▼尻取文句繪 同じく繪と字と交りたるものにして、中に彩色刷と紫一色刷とあり、區劃せると區劃せざるとあり。
 ▼列聖體にして唄の意を含みたる繪 最も有名なるはちんわんにして、又手遊繪中殊に優れて有名なる一つなり。
 ▼社會風俗繪 役者繪・相撲繪最も外し、尤も役者繪とて錦繪の役者繪の如く精巧なるものに非ず、相撲繪亦然り多くは數十劃に區劃したる中に書きたるものなり。
 ▼武者繪 同じく錦繪に於けると異なる武者盡・大將盡・英雄盡と云ふが如し。

▼動物に衣類を着せたる繪 中にて猫の鰻屋猫の湯屋は有名にして殊に面白し、鰻屋は三段にて、下段門の外、中段鰻屋の料理場、上段客座敷なり、湯屋も亦三段、下段湯屋の外部、中段二階、上段風呂及び流し場なり、殊に面白きは湯屋の暖簾に記しとして、淺黄地に猫の首輪と鈴を白く

るもの、小なるは十六劃に仕切りたるものあり、繪風としては、金時の鯛鯛み。渡邊の綱羅生門の圖。頼光鬼退治。加藤清正。牛若辨慶。おかめ。磐若。達摩。波に日の出等にして、字風としては嵐。蘭。龍。魚等なり、字と繪と半分宛畫きしは福の字と牡丹を書きたる福牡丹なりき。



▼變り繪 折りて變る繪として、天人様となり船となり舌出しとなり碁盤となるの如き、又は福助となり三番叟となるが如き類にして、重ねて變る繪としては縦に三本線ありて、

其線により折り重ねて變るもの、僧正が蛙となり娘が水瓜となり天神様が獨樂と代る類なり。

▼組立繪 散布的とは重に芝居狂言稀に風俗を表はしたるが多く、一定の場所を定め此中に山あり川あり木あり人物あり、彼方此方と散布して飾り立つる飾り繪なり、簡單なるは平面的なるが、複雑なるは屋根は屋根椽は椽と突出し半ば立體的なる組立をこる、最も精巧なるに至りては數十枚續きに至れるあり、夫の忠臣藏十二段揃に至りては三十枚以上の續き繪なりき。集中的とは一つの物に集中して組立るものなり、山車を作る之れ車より囃方、上の人形に至る迄皆集中的なり、又は三月五月の雛人形の段に飾り立てたるを作る等の類なり。(集中的に至りては飾り立てたるをも糊ぐ倉あり、其扉を糸にて引きて開閉する如く作り、閉ぢたる時は單に倉の外部を表はし、開けば内部に大黒様の鼠が米を倉に運び込む所、又は芝居小屋の戸を開けば中に芝居をなし居り、それが又一寸折り返す事によりて他の狂言になる如く、半ば變り繪の一種たる性質を帯びたるもあり)

▼手工繪 合せ繪は人物の表裏を書きたるを切り抜きて張

り合せ得るの類、姉さん・武者・相撲等に多し、簡單なる貼り付け繪としては箱を貼るの類なり。

▼影繪 廻り燈籠に使用する白地に黒又は赤青にて暈せる地に黒にて畫ける燈籠繪と、手にて種々の形を作り之を障子に寫したる所を畫きたる寫し繪と二種あり。

▼裝束繪 鬘を被る繪は役者ありて其上に澤山の鬘あり、之を切り抜き被せるの繪なり、衣類・面も同じ。

▼假想的 書家の想像によりて畫きたるものにして、例へば地獄極樂には針の山・賽の河原等を表はし、朝比奈鳥廻りには大人島・小人島・手長足長等を表はし、或は龍宮城を畫きたる等の類なり。

▼寶蓋 七福神の面・槌・鯛袋・四重塔・琵琶・巻物・鹿・福壽草・萬年草・鍵・分銅・隱囊・隱笠等を表はす。

▼福笑 おかめの面型と別に目・口・鼻・位星・赤き頬等あり之を切り抜きて目を閉ふりて面型に之を置き、正しく置きたるを勝となす。

▼十六むさし 長方形と三角形とに區劃し、更に之を等分に細かく區劃し道を付けたる盤面あり、親一枚と子十六枚とありて此の道筋を辿りて詰め、或は詰め得ぬによりて勝

浮世繪を題材とした俳句

田中案山子

浮世繪が足利期の禪的茶的の畫風を脱して、徳川期の初めに於て、平民的な一新生面を開いた如く、俳句も貴族的文學の連歌から獨立した俳諧が、徳川初期に松永貞徳によつて中興せられ、終に今日の有様に至つたのはいふまでも

ないことである。處で浮世繪畫家で俳句をやつたものは、貞徳の門人立圃を初めとして、芭蕉の弟子で俳名を曉雲と呼び、其角嵐雪など、交り深かつた英一蝶や、松月堂法眼不角千翁の門人であつた奥村政信や、谷素外の弟子の北尾



鳥居清里筆

取つて美人の傍にもありと記し、鬼の頭の處へまたと書し、傍にもありとかき、終りに百合の花とかいて「姫もありまた鬼もあり百合の花」と讀ませたその當意即妙に、藩老を驚嘆させたといふ話もある。また彼の俳文に就いては、

敗を決するなり。
▼双六 現時と同じと雖も但だ當時は道中双六・武者双六・役者双六等多かりき。
▼疱瘡繪 疱瘡の禁厭の繪なり、凡て全部朱の二色刷とす。
▼千代紙 箱を貼り又は姉さんの着物となす等、凡て女兒のみに用ゐられたる模様書なり。
▼紋盡 最も普通なるは役者藝人の紋を畫きたるものにして三升・丸にいの字・三つ扇・重ね扇・福良雀・雀に飯の字・木瓜・松皮・三つ瓢箪等最も多し。
▼目盤 一枚に大抵二つを藏めたり、切り抜きて耳紐を付けて被るなり、花見の時など最も盛んに用ゐらる。
▼鞘繪 見る所は扁平狀の不思議なる繪なるも、之を刀の鞘又は鞘と同じく光澤ある凸圓形に寫せば普通の繪となる以て此の名を生ず。
以上は只だ其大略を擧げたるに止まると雖も、如何に其種類の多き如何に其興味の深きや、以て社會當時の状態を寫し得て、風俗研究上一大有力なる資料たる事を信じて疑はざるなり。(項中二三省略したる個處あり著者に謝す)